

最先端医療を提供する病院らしい、シャープで独創的なたたずまいが印象的な北海道大野記念病院。しかし、ひとたび中へ足を踏み入れれば、明るい光が差し込む開放的な空間と、動物や花が描かれた温かみのあるデザインを感じられる。



地域住民が集まる  
“憩い”の高度急性期病院

吹き抜けが設けられ、心地よい自然光が降り注ぐエントランスホール

札

幌で30年間にわたり心臓疾患治療の実績を重ねてきた旧心臓血管センター北海道大野病院を運営する社会医療法人社団碩心会と、道東地域において救急医療やへき地医療に取り組んできた社会医療法人孝仁会が合併し、2016年10月に誕生した北海道大野記念病院。「がん、脳卒中、心臓病の三大疾患と運動器疾患を軸とする高度急性期医療、そしてこれらの早期診断と治療を可能にする予防医療が当院の強みです」と齋藤孝次理事長は語る。これを実現するために、手術中でもナビゲーションシステムとMRI撮像によりリアルタイムに正確な情報共有ができる「術中MRI」をはじめ、広範囲にわたる部位の放射線治療が可能な「サイバーナイフM6FI+」、

社会医療法人孝仁会  
北海道大野記念病院  
〒063-0052  
札幌市西区宮の沢2-1-16-1  
https://ohno-kinen.jp/  
設計：株式会社竹中工務店  
敷地面積：12117.93㎡  
延床面積：26659.82㎡  
構造：RC造・S造・一部SRC造



三角を基にした  
斬新なデザイン

建築のポイント

- ・最新機器をそろえたハイブリッド手術室
- ・街並みが一望できる最上階のレストラン
- ・色覚障がい者に配慮した色の選択

齋藤孝次

社会医療法人孝仁会理事長



最上階のレストランからは山や街並みが一望できる

From Contractor

広田彰紀

株式会社竹中工務店  
北海道支店設計部  
(現・東京本店設計部)



すべての人が使いやすい  
ウェイファインディング手法

齋藤理事長からうかがったのは「すべての人が使いやすい病院」にしたいということ。その一環として、自分のいる場所や行き先がどこかが正しく認識しやすくなる“ウェイファインディング”に基づいたサインやデザインを意識しました。また、すべての病室から眺望を楽しめるよう快適性も追求しました。

多くの高度医療機器を設置したため、通常より長い期間が必要となりましたが、オープンに向けて手順などを工夫しつつ全社をあげて取り組みました。



先進X線撮影装置などを組み合わせたハイブリッド手術室(左上)

エレベーターホールは、各階で異なる色と動物をあしらっている(右上)



災害時に備え、10トンの重さにも耐えられるヘリポートを設置(左)

「ダ・ヴィンチXi」など、最新の高度医療機器を多数導入。低侵襲で確実な医療を追求している。これらが並ぶ、ハイブリッド手術室を含む最新の8室の手術室は、緊急時にも人の行き来をさえぎられることがないよう広々としたスペースを確保した。

最新鋭の設備をそろえる一方で、「誰にとっても利用しやすい」工夫も凝らした。たとえば、それぞれのフロアには異なる動物や花が描かれており、子どもや海外から訪れる人から好評だが、それらは色覚障がいを抱える人でも認識しやすいように色合いに配慮している。

また、閉塞感を与えないよう、建物内部は大きな窓から日光が差し込む開放的な空間にした。齋藤理事長自ら太鼓判を押す最上階のレストランからは、札幌の山々と街並みを一望することができ、地域住民も気軽に訪れる憩いの場になっている。その隣には各種健診に訪れた人がくつろげる休憩室も完備されている。

「医療の質を追求するだけでなく、患者さんをはじめあらゆる方に親しみを感じてもらえる病院をめざしています(齋藤理事長)」